

井出家伝承では、この座敷は上方の工匠が造ったものといわれ、関東地方や、長野県の民家の客座敷ではほとんど他に類例のないほど洗練されたものである。

なお、この建築は当初板葺であったものが、棧瓦葺に改造されている等いくつかの後世の改造はみられるが、主要部分は、当初の建築意匠を良好に保持している。

武水別神社摂社高良社本殿

所在地 更埴市八幡三〇一二
交通 信越線 屋代駅

高良社本殿は、更埴市の八幡宮として有名な武水別神社境内の参道左側に、参道に正面を向けて建てられている小建築である。

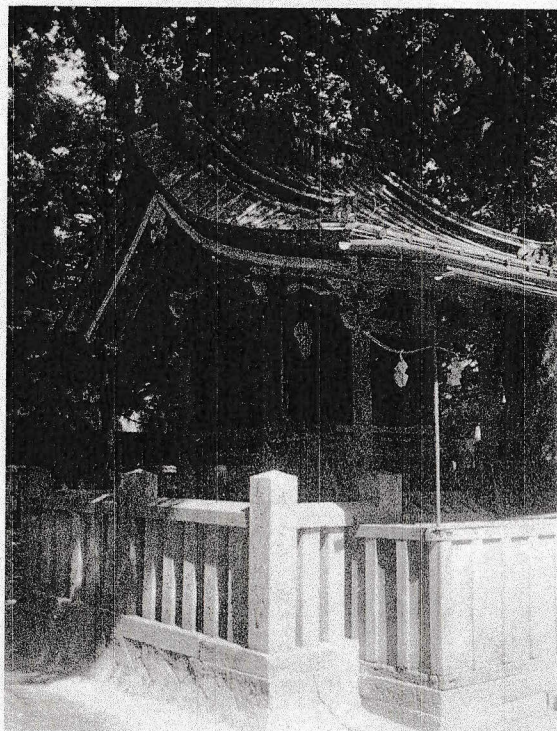
この建築の創建及び沿革について、古くから祀られてきたと伝えられているが確かな記録はない。しかし建築の様式からみて室町時代後期、十六世紀ごろに建てられたと考えられる。

建築構造形式は、木造平屋建、一間社流造、銅板瓦葺葺、規模は梁行二・三七メートル、桁行一・四〇メートル、延面積三・三二平方メートルであり、建築の形式は一間社流造の系統に属するが、ふつうの流造にみられる周囲の廻縁や正面の階段は省略され、正面に小さな縁を設けるのみで、いわゆる「見世棚造」に類似した形式といえる。また部分的な構造も、主屋の柱上の組物は舟肘木を用い、軒も垂木を用いない板軒であるなど省略した形式であり、この建築の意匠に一種の軽快な趣きを与えており、同時代の本県神社建築のなかで特色ある存在となっている。細部の意匠で重要な部分は向拝の組物と側面の妻飾りである。向拝の組物は三斗で、頭貫木鼻に絵様をつける。向拝の正面中央に江戸時代の後補によるものと推定される龕股がある。妻飾

りは、虹梁の上に大瓶束とさす組を組み合わせた特色ある形式を用いている。懸魚はこの時代としてはよく整った形をしており、軒は板軒で前後とも一軒とする。これら各部の様式、とくに虹梁や木鼻の絵様などは室町時代の特徴を示すものである。内部はほぼ中央に板扉を設けて二室に分け、境の板扉には牡丹の彩色をした絵を描いている。外部の主要部材は朱塗であるが、実肘木、斗、木鼻等の一部を胡粉塗、扉や破風板の一部を黒塗としている。

高良社本殿は室町時代の建築としては主要部材が良く保存されているが、当初は板葺であったと推定される屋根が銅板葺に改造され、主屋の柱も下方が根継されている。

武水別神社摂社高良社本殿



石造龕

所在地 北佐久郡北御牧村下之城三三七
交通 信越線 田中駅

この石造龕は「宮停留所」から徒歩で三分、高い石段上の山麓に建つ両羽神社本殿の軒下、地上に安置されている。

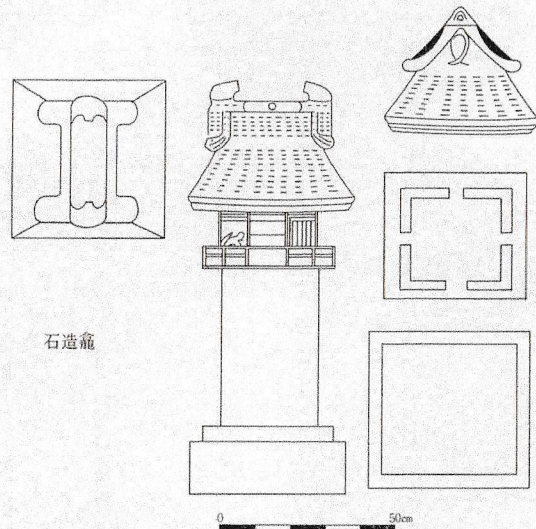
構造及び形状

安山岩質の石材を用い、基礎の上に竿石を立て、上に宮殿を重ね

銘文	
(基礎向って左側面)	(基礎向って右側面)
元祖 神前江 軍中之 祈念成就 海野 望月 両家	三月廿八日 癸酉歲 時正慶二 獻之 矢沢氏 根津氏 兵米二石 追而
(基礎後面)	
祈念申 大宮神守	

される。

銘記は、字体とその彫り様から後世の追記と見られる。なお、信濃奇区一覽(天保五年、井出道貞著)に、近年(天保の頃か)本殿後の老松の下の中に埋れていたのを掘り出した旨を記しているので、神祠として造立したものであることを知るほか、詳細については不明である。



ている。

基礎(台座)―方形で二段に造り、三方に銘文を刻む。

竿―方形、縦長で下方にのみ縁をとる。正面に鵜亀の線彫り、他の三面には樹幹の薄肉彫りと線刻の開花、青葉、結実の絵様が彫刻されている。

宮殿―宮殿は単層、入母屋造り、平入りで、軸部と屋根はそれぞれ別石、軸部下部(中台)は薄肉彫り勾欄型をあらわした廻縁をまわし、正面中央に階段付入口を設け、その両側には薄肉彫りの左右相對した狛犬を刻む。他の三面にも中央に階段付入口を設け、その各左右に連子形を刻む。

屋根―鉋貫で大棟の両端に鵜尾をあげ、屋だるみをつけ、軒は二軒真反りにし、下面に槿形を刻む。妻は反り破風とし、棟木下に懸魚を線刻する。また大棟中央正面に紋(巴紋らしい)を刻み、屋根表に枳殻を表した如く横行の列線を刻む。

法量

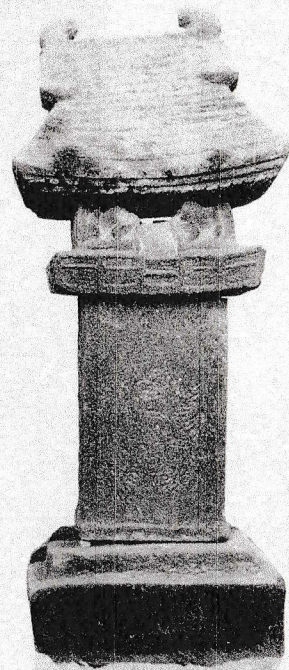
總高	117.5	
	横	高さ
基礎	横	45.0
	高さ	19.0
竿	横	26.0
	高さ	43.5
中台	上端	39.5
	下端	38.0
軸部	高さ	7.0
	横	27.5
軒	高さ	8.5
	上端	44.0
屋根	高さ	27.0

(単位 cm)

造立年代及び来歴

構成上や屋根及び軸部の造り等からみて法隆寺所蔵の玉虫厨子に範をとったと思われる石造の宮殿である。

宮殿の屋根も軸部に比して竿石がやや細目で、竿には後世の手が加わっているようであるが、これほど工芸的意匠に富んだ石造宮殿は他にあまり例がなく、造立も室町時代初期を降らないものと推定



石造籠